様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

報告者	社会系コース／原田　昌博

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．教育大学教員としての授業実践

本学の目的は，豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し，学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには，教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が，学校現場の実践と関連性が保たれていることが必要である。あなたは，教員養成大学の教員として，本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか，これまでの取り組み状況を総括し，具体的に示して欲しい。

1．目標・計画

教員養成大学の外国史担当教員としては、学生に外国史を理解させることはもちろん外国史に関する教材研究を行うための能力を涵養することが重要であると考える。これまでも外国史関連授業の中では、社会科授業の教材研究に資することを目的に、一方では通史として長期的な視点から歴史をマクロに捉える内容、他方で特定の時代を多面的な視点（政治・経済・文化など）からミクロに捉える内容を設定してきた。本年度においても、「外国史概論」では外国史の通時的な理解のために200年の長期の歴史を因果関連を明確に理解できる内容を設定する。逆に「外国史特論」では特定の時代の歴史を様々な観点から分析する内容を設定し、学生が歴史を捉える視点を育成していく。授業方法としては、講義では文字・写真・図表など様々な史資料を提示することで学生の歴史的関心の喚起と歴史的思考力の涵養に配慮する。さらに演習では、学生による発表の場を設定し、プレゼンテーション能力の向上を図るとともに、積極的に発言する態度も育成するよう心がける。

2．点検・評価

①目標の通り、前期の「外国史概論」では比較的長期間（200年）にわたる歴史を因果関連に基づいて説明できるための内容を設定し、一定の成果を上げた。さらに、後期の「外国史特論」では一つの時代を多面的な視点（政治・経済・文化など）から捉える内容を設定し、予定通り授業を行った。
②前期の授業では、各回の講義用レジュメと資料を準備するとともに、文字・写真・図表など様々な史資料を提示することで学生の歴史的関心の喚起と歴史的思考力の涵養に配慮した。後期の授業でも、詳細な授業レジュメと印刷資料に加えて、ビデオ教材や実際のヨーロッパの写真、現物資料を積極的に活用していて授業を展開した。
③演習では論文の内容報告を中心に学生の発表の場を設け、積極的な発言を促した。後期の演習でも、史料の読解報告を中心に学生の発表の場を設けて、学生の積極的な発言を促すとともに、学生同士の意見交換を行った。さらに、今年度のゼミでは自分のテーマに関する研究報告と質疑応答を一人当たり6回（各回1時間）行った上に、ゼミの指定図書に関する「読書会」を前後期ともに開催し、報告・司会・質疑・意見交換を学生を主体に実施して、歴史学に関する知見を深め、学生の自主性や積極性を引き出す成果を上げた。

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

①進路や日常生活の悩みなどについて学生からの相談があった場合、随時積極的に応じ、適切な助言を行う。
②情報提供や日常の対話などを通じて、指導学生の就職指導を行い、特に教員採用試験の受験または大学院への進学に対する動機づけをはかる。

２．点検・評価

①授業・ゼミ・会議以外は研究室を開放して、ゼミ所属学生や講義受講者などの質問・相談に随時積極的に対応した。
②教員採用試験を受験するゼミ所属学生には大学が行う諸行事・説明会への出席を促し、卒業・修了年次の指導学生は希望する地域・校種の教員採用試験を受験した。

Ⅱ－２．研究

１．目標・計画

①科学研究費補助金の申請（継続）を行う。
②従来からの研究テーマ（ワイマル共和国期ドイツにおけるナチズムの労働者政策）の研究を継続するとともに、新しいテーマ（ワイマル共和国期ドイツにおける右翼労働運動の展開）に関して夏期休暇中に渡独して史料収集を行い、その分析を進める。
③これまで収集した史料と併せて分析・検討を加えていき、論文・学会発表を通じてその研究成果を公表したい。

２．点検・評価

①科学研究費補助金の申請を行った（継続・若手研究B）。
②従来からの研究テーマ（ワイマル共和国期ドイツにおけるナチスの労働者政策）の研究を継続するとともに、9月には新しいテーマ（ワイマル共和国期ドイツにおける右翼労働運動の展開）に関してドイツの公文書館・図書館での史料調査・収集を実施した。今後、その分析を進める予定である。
③昨年度までに収集した史料を用いて紀要論文を執筆・投稿した。さらに、科研テーマに関するドイツ語論文（ドイツで出版される論文集に掲載予定）をまとめて投稿した（現在印刷中）。

Ⅱ－３．大学運営

１．目標・計画

①学内での委員としての職責を果たし、本学の運営に貢献する。

２．点検・評価

国際交流委員会・学生支援委員会および教育実践フィールド研究運営委員会の委員として委員会に出席し、部およびコースと委員会のパイプ役を果たした。

Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携，国際交流等

1. 目標・計画

①評価授業の参観や附属学校教員との意見交換などを通じて附属学校での実習指導を支援する（附属学校）。
②鳴門史学会での活動を通じて、地域社会との人的・学術的な交流を推進する（社会連携）。
③留学生を積極的に受け入れる（国際交流）。

2. 点検・評価

①海外出張のため9月中に行なわれた指導学生の教育実習授業参観ができなかったが、11月での副免実習では附属学校に出向き、授業を参観し、指導を行うとともに、附属学校教員と意見交換を行った。（附属学校）
②鳴門史学会の活動として大会（10月）および年4回の例会を企画運営した。特に、研究大会に関しては「三好政権と勝瑞城」をテーマに中世の阿波地域の様子を考える講演会を企画・実施し、多くの一般市民が来場した。さらに、大学・地域連携講座の一環として松茂町図書館で「戦後ドイツにおける過去の克服」と題した市民向け講座を行った。（社会連携）
③大韓民国から留学生1名を受け入れ、研究指導及び生活上のサポートを行った（国際交流）。

Ⅲ. 本学への総合的貢献（特記事項）

特に以下の３点で貢献した。
①授業の充実（方法・教材など）を積極的にはかり、学生の外国史への理解を可能な限り容易・具体的にするように努め、結果として授業アンケートなどで学生の高い評価を獲得することができた。
②科学研究費補助金（継続）を獲得し、本学の外部資金獲得に貢献した。
③ドイツで未公刊史料の収集を行い、新たに発見した史料を用いて日本語及びドイツ語の論文を執筆した。